

# 自分を変えた フランス留学

## フランス整形災害外科の体験



図1 上:モーレーの街並み 下:ホームステイ先の家屋は変わらずに健在(30年ぶりに訪問した際の写真).



### はじめに

このたび飯田寛和先生(前・関西医科大学整形外科主任教授)よりフランス整形外科事情について、若手の整形外科医に伝授するよう依頼をいただきましたので、自身の体験を通してフランス整形災害外科について述べてみます。

私は2015年7月より日仏整形外科学会(Société Franco-Japonaise d'Orthopédie: SOFJO)4代目会長を拝命しております。同会は1987年に発足し、初代会長は七川歆次先生、二代目は小野村敏信先生、三代目は小林晶先生と、錚々たるメンバーの後を引き継ぐことは重責ですが、身をもって経験したフランス医学やフランス留学を後進に伝えていくことが私の使命であると信じております。



3年間の留学中に術者としても多くの手術を経験させていただく。(左の写真／中央が筆者、右の写真／左が筆者)

順天堂大学医学部整形外科学教室主任教授

# 金子和夫

Kazuo Kaneko

- 1979年 順天堂大学医学部卒業
- 1985年 順天堂大学医学部整形外科助手
- 1985年-88年 フランス留学
- 1988年 国立湊病院整形外科医長
- 1993年 (財)東京都保健医療公社  
多摩南部地域病院整形外科医長
- 1998年 順天堂大学医学部附属伊豆長岡病院  
整形外科講師
- 2001年 順天堂大学医学部附属伊豆長岡病院  
整形外科助教授
- 2005年 順天堂大学医学部附属静岡病院整形外科教授
- 2010年 順天堂大学医学部整形外科学教室主任教授
- 2012年 フランス整形災害外科学会名誉会員



第17回 SOFJOにて HERNIGOU 先生と。右が著者。

私とフランスとのかかわり始めは、順天堂大学整形外科入局1年目の1979年に、2年間のフランス滞在を終えた6年先輩の一青勝雄先生（現客員教授）の帰国がきっかけでした。

一青先生よりフランスでの診察の取り組み方、オリジナル手術法、生活ぶりなど、日本との違いをお聞きし大いに興味をそそられ、留学を強く勧めていただきました。フランスの内情についてまったく知らないにもかかわらず、数年後のフランス留学を夢見て実現に努めていきました。その当時は順天堂大学医学部附属伊豆長岡（現順天堂大学医学部附属静岡）病院勤務で、フランス語の通信教育を受けましたが、実際の留学時にはほとんど役に立ちませんでした。パリを中心とした1985年5月から1988年6月まで3年強のフラン

ス留学は苦労の連続であり、今だから笑い話にしていますが、冷や汗の毎日でした。反面、臨床研修を十分に体験したことは一生の財産と自負しております。

## 立ちはだかる語学の壁



パリでの臨床研修の前に立ちはだかるのはフランス語に間違いありません。9月から病院に入る前の4ヵ月間を語学研修にあてました。1985年5月にフランス北西部ブルターニュの地モーレーに着いたのは、日本から48時間後の夜です。あらかじめ医師の家庭をホームステイ先に希望しており、最初のホストファミリーが一家でモーレー駅まで迎えに来てくれました。その夜の食事は今で



図2 左：JUDET 式人工股関節，中：Gérald LORD 先生，右：LORD 式人工股関節



図3 寛骨臼骨折後の陳旧例に人工関節を使わずに，関節温存術を施した一例



図4 Schanz 骨切り術



図5 Colonna 骨切り術

も忘れません。生牡蠣とスモークサーモンの前菜から始まり、メインの羊のもも肉 (gigot d'agneau)，最後のチーズまで鮮明に記憶しています。もちろんワインも…。アルコールが入ったせいか言葉も進み、フランス留学開始は成功と思われました (図1)。

しかし翌日からの語学研修は日本で受けてきた

通信教育などはまったく役に立たず、進歩もないままブルターニュからニースに移動し、ニース大学の2ヵ月間の夏期語学研修に入りました。この研修で日常会話程度は可能になりましたが、パリ病院内でドクターやパラメディカルと会話するには不安だけでした。

9月にいよいよパリに移動しましたが、パリ5区に借りたアパートマンの家主は最悪で、通常料金の3割増しの現金払いで、それは税金逃れの手口だったようです。そこで、持ち主がパリ大学教授のアパートマンに移り、やっと研修にも身が入るようになりました。



図6 JUDET 先生が開発した前方進入法に用いる牽引ベッド



図7 パリ・アメリカンホスピタルの手術室からはエッフェル塔も眺めることができる



## 股関節外科研修 (セメントレス人工股関節)



LORD 先生の下で、JUDET 先生から続くセメントレス人工股関節手術の研修が1985年9月下旬から始まりました(図2)。経験したさまざまな股関節手術を図3～図5に載せます。図6はRobert JUDET 先生のJUDETの牽引ベッドを使用した前方進入法による人工股関節全置換術です。

JUDET 先生が前方進入法だったのに対し、LORD 先生になってから後方進入法に変わったのは、牽引ベッドを扱える技師がいなくなった事と、後方進入における視野の良さという面から変

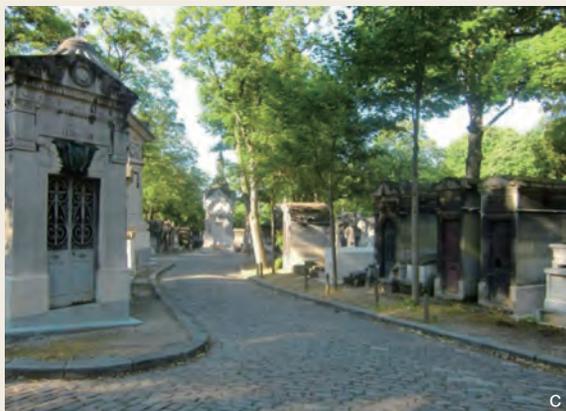
化していったと聞きました。うれしかったのは、研修開始から3ヵ月後のクリスマス時期にプレゼントとして術者としての第一例目を経験させていただいたことで、粹な計らいと感謝しています。フランスでの3年間で術者として60関節を、助手としては約2,500件の手術を経験させていただきました。人工股関節全置換術だけでなく、各種骨切りや再置換術も手伝う機会に恵まれ、LORD 先生のプライベート病院であるパリ・アメリカンホスピタル(1910年創設)にも何度か助手として参加しました。手術室からエッフェル塔を眺めながら筋鉤を引くという経験は、今でも脳裏に浮かびます(図7)。



a



b



c



d

図8 a: バスチュー広場, b: サンマルタン運河, c: ペールラシエズ墓地, d: ビュット・ショールモン公園



図9 研修を勧めてくれたSAFFAR先生と海外からの研修生

LORD先生との数ある思い出の中から一つ紹介します。フランスはストライキの国です。しかも確実に実行します。LORD先生の病院はパリ19区にあり、普段なら地下鉄で30分で着きます。私の住んでいた5区からは7kmくらいの距離です。ある手術日のことですが、その日は地下鉄のストライキでパリのメトロ全線が不通となりました。レジデントの多くはパリ郊外に住んでいるため、病院に来ることは不可能です。日本ではストライキがあっても何とかして病院にたどり着く努力をしますが、ほとんどのレジデントは病院に来ません。私は日本人の習性か午前3時に出発し、歩いて7時に病院に到着しました。LORD先生はたいへん喜んでくれ、帰りは車で送ってくださいました。それ以後、ストライキのたびに送迎していただきました。しかし、私は心の内で恐縮していました。というのも、実はバスチュー広場、サンマルタン運河、ペールラシエズ墓地、ビュット・ショールモン公園を、計画通りに巡りながら散歩しつつ病院に到着したまでなのです(図8)。

## “ 研修終了試験，ラットの腎移植で尿が排泄されれば合格。



図10 左：パリ第VI大学附属病院 右：Ecole de Chirurgie



図11 techniques microchirurgicales の修了書

### SAFFAR 先生の下での手外科研修

LORD 先生の病院に週1回手外科の専門医が手術に来ていました。SAFFAR 先生（図9）という山内裕雄順天堂大学名誉教授の親友で、たいへんな親日家の先生です。特に手関節手術では月状骨壊死に豆状骨を移行したり、有頭骨短縮術などオリジナリティの高い手術をされていました。2015年7月に逝去されましたが、フランス手外科学会では Chir Main（フランス語圏手外科雑誌）の編集長に長期就任されていたので、大きな打撃を受けています。なお、当時私と共に SAFFAR 先生の下で研修した MATHOURIN 先生は、2016年にフランス手外科学会を会長として主催しています。先生には2018年3月に不肖金子和夫主催の関東整形災害外科学会にて特別講演（手関節鏡について：2014年欧州手関節学会会長）をご依頼していますので、よろしければご参加をお願いいたします。

### 手に汗握る マイクロサージェリー研修

私の所属していたパリ第VI大学 Université Pierre et Marie Curie（ピエール・マリー・キュリー大学）に Ecole de Chirurgie という研究所があり、Cadaver センターや微小血管縫合トレーニングセンターなどが併設されていて、多くの整形外科医が研修していました（図10）。私も1987年に techniques microchirurgicales のコースを約半年受講し、研修終了試験はラットの同種腎臓移植と大腿動脈バイパス手術等を実践し、何とか合格しました。ラットの同種腎臓移植は、移植した尿管から尿が排泄されれば合格という、手に汗握る実地試験でした（図11）。

### ストラスブールにて外傷研修 (GROSSE and KEMPF 法)

GROSSE は gamma nail の発案者でもあります。1980年代に、回旋固定性や telescoping に対

応した画期的なデバイスである interlocking nailing 法を開発しました。ストラスブールセミナーでの症例を供覧します (図 12)。

運河に囲まれた風光明媚な町ストラスブール (図 13) は、古来からドイツとフランスの国境問題が存在して、7 回国名が変わったという不安定な土地ですが、1950 年に両国の和解の象徴とも言うべきヨーロッパ議会が設立されました。

## おわりに



私は 30 年あまり前の 3 年間のフランス留学を通じて、多くの先輩・友人・後輩に恵まれました。研修を始めたパリの病院で同時期に働いていた Christian DELAUNAY 先生が、今年のフランス整形外科学会 (SOFJOT) の会長に決まっています。DELAUNAY 先生は股関節外科医で、パリ郊外の病院で長く Adalbert KAPANDJI 先生と共に多くの手術をこなしていました。

日仏整形外科学会 (SOFJO) のフランス側会長の Philippe HERNIGOU 先生は昨年 SOFCOT の会長であり、次々回モンテリオールでの国際整形災害外科学会 (SICOT) の会長に内定しています。



図12 症例内容とGross-Kempf術後のリハビリ, スイミング  
 左:受傷時, 中:術直後, 右:術後1年

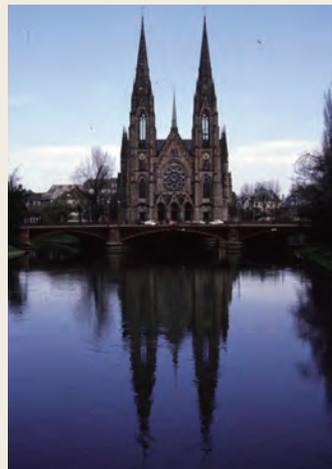


図13 ストラスブールのサン・ポール教会



図14 Christian DELAUNAY 先生

なお、SOFJO では、多くの留学希望者を研修先に紹介し、2017年3月現在までに日本からフランスへ82名、フランスから日本へは19名を交換しています。留学を希望の方は、ぜひSOFJOのホームページをご覧ください。